



マイカーデパート

花は小さな幸せに感動を与えてくれる

実家の母は植木が好きで、その中で育ったせいか小さいころから花が大好きでした。花や植木を手入れしたり水やりをしているときは、不思議と心が落ち



つくものです。庭の松や真木は主人が、草花は私が手入れしています。いつも観葉植物でいっぱいの中に囲まれて仕事をしています。緑は疲れた目にはとてもいいですね。中でも子どもたちが小さいころにかかりつけだった小児科の先生にいただいたもので、木立ペコニアやゴムの木など30年以上もたっているものもあります。



鴻巣の中山洋子さん(60歳)

私の家は横山大山線沿いにあるので、道行く人や運転する方がきれいに咲いている花を見て心を和ませてくれたらいいなあと思い、いつしか外にも並べるようになりました。見知らぬ人から「いつもきれいですね、楽しませてもらっていますよ。」なんて言われると、お花を通しての人のふれあいを大切に思います。

我が家の“だんご三兄弟”

暴れん坊の長男(崇海9歳)、甘えん坊で、ちょっぴり泣き虫の次男(優都7歳)、昨年4月に三男(和功)が生まれ、賑やかな毎日です。兄二人は“やんちゃ息子”ではありますが、こと和功に関しては、まるで母親のようで、先日「お母さん！ちゃんと和功のことを見ててよね。僕心配で眠れないからね。」なんて、どちらが親だかわからない始末です。パパもパパで、腕枕をしてあげ「ただ一人、子分ができたと浮き足立つ者」もいますが、こんなふうに愛されて育つ和功は、本当に幸せ者です。

友人に「赤ちゃんは親を選べないのではなく、親を選んで生まれて来るんだよ。」と言われ、私はもしそうだとするなら「私たちを選んで生まれて来てくれてありがとう。」とこの子たちに伝えたいです。

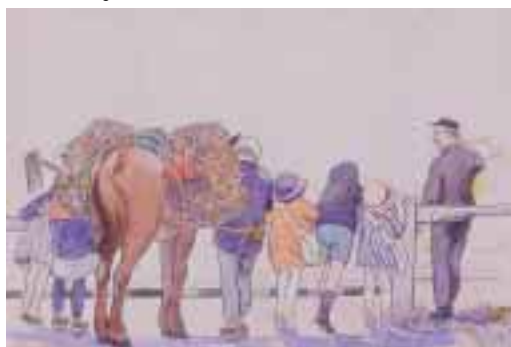
大字中田 寺田祥江さん 32歳



KOGA 万華鏡

『コドモノクニ』の人気画家・岡本帰一の童画世界  
～博物館企画展「子供の王国」展示作品より～

大正11年(1922)、古河出身の鷹見久太郎により絵雑誌『コドモノクニ』が創刊されました。文章の添え物とみなされていた絵画を主役とする芸術性の高いもので、童画の世界に黄金時代を築いた絵雑誌として評価されています。ここでは武井武雄をはじめ当時人気の童画家たちが筆をふるいましたが、特に子供たちから広く愛されたのが岡本帰一の童画でした。



岡本帰一「ふみきりばん」

では、創刊第一号より絵画主任を務めました。ふみきり番の駅員を主題とする本作品は、『コドモノクニ』大正14年(1925)10月号に掲載されました。野菜を積んだ馬を引く素朴な農家の家族。その横で山の手風のモダンな装いの子どもたちが、汽車を見ようとする姿を乗っけています。優れたデザイン力や、明るく澄んだ色調による写実的な表現にみられるように、帰一の絵の魅力は、何よりも「分かりやすさ」にあったといえるでしょう。明るく健康、無邪気で好奇心旺盛な、ありのままの子供の姿をとらえた素直な画風は、大正デモクラシーに乗ったハイカラな風俗描写と相まって、多くの人々に好評をもって受け入れられたのです。

岡本帰一は明治20年(1887)兵庫県淡路島生まれの東京育ち。幼いころから絵に親しみ、東京府立第一中学校を卒業後、黒田清輝の主宰する白馬会洋画研究所で絵画を学びます。大正元年(1912)岸田劉生らと、新しい芸術思潮による美術団体フユウザン会を結成しますが、これが原因で白馬会を破門されてしまいます。大正4年(1915)に、富山房の『模範家庭文庫』の挿絵を手がけたことから童画家としての活動が始まり、『コドモノクニ』

古河歴史博物館 学芸員 倉井直子